

芥川だより

発行日***2019年4月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集・発行人

下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624



***** 一部200円です *****

あなた、何をそんなに焦っているんですか？



ある時、15分500円のタロット占いの張り紙を見て、乳がんの手術を終えた家内が見てもらうというので私もついでにみてもらった。もともと占い好きではないのだが占い師が何を言うか興味がわいてきたからである。家内の後、2階に上がり占い師と対面した。50前後の女性が椅子に腰掛けながら、何を占ってほしいか、と尋ねてきた。私は、これと言ってないのですが得意の占いをやってみていただければ、と言った。さっそくカードを並べて1枚を私が引いた。そのカードを見ながら「何をそんなに焦っているんですか？」と聞いてきた。私は何も焦ってません、と答えながら、やられた！と思った。

私は幼い時から、せっかちなところがある。心配症というか気が小さいというか、人に叱られるのが苦手なたちで何事も早くする癖がある。年上の者たちに囲まれ大人びたせわしない生活が原因かと思うのだが、ゆっくりと物事をはこぶ気風に欠けている。何事もテキパキと片付けないと馬鹿じゃないかと思ってしまうクセがある。

何かにつけて早く早くと急ぎ立てる気持ちが強く、ゆっくりと考え味わうことが出来ない。これまでこの性格が気にはなっていたのだが、深くは考えてこなかった。むしろ、とろい人を馬鹿にしてきたきらいがある。賢い奴は早く出来、馬鹿はとろい、という考えである。

ところが、占い師に言われてハタと気づいた。自分がこれまで感じてた空虚感はこのせっかちな性格のためではないかと。草木や自然を眺めてももう一つその良さを味わえない。何か気ぜわしく、何かに追い立てられるような気分が消えなかったのは、この性格のためだったのではないかと気づいた。

人付き合いでも、ゆっくり味わう。本もゆっくり読む。これまでわざと無視してきた周りのモノごとをもう一度ゆっくり見渡し焦らず時間を気にせず味わうことで新たな発見があるように思えてきた。たのしくておもしろいことは、身近に目の前にある。何も遠いところのものを追いかける必要はない。

死をめぐるあれやこれ(54)

石川 吾郎

病気になれない

この冬に受けた健康診断で糖尿の数値が悪かった。これには自分も反省し、食事を見直し、昔やっていた水泳を再開した。幸い自宅の近くにプールがあるので週に二三回通うことができる。

小生、団塊の世代の末尾に連なる年代で、いろいろ生活習慣病が気になるところだが、とりわけ遺伝的な要素が大きいと言われる二型糖尿病には警戒が必要だ。親戚筋にこの病気が多いからだ。

この合併症は多岐に渡り、腎障害での人工透析、失明、神経障害、心筋梗塞などの血管障害、感染症にかかりやすいなどなど。ちょっと健康本を読んでみると、怖い病気がずらずらと書き連ねてある。これを期にこれまで身についてた不摂生からおさらばする試みを、本気でしようと思っている。

おりもおりこの国の政治は、国民の健康などには無頓着で、高額な墜落する戦闘機はじめとした武器を爆買し防衛費を高騰させ、国民の虎の子の年金を株値つり上げのため海外のハゲタカファンドに差しだし、国民を貧困化し経済をデフレに陥らせる消費税を増税し、製薬や保険のグローバル企業の儲けのために健康保険制度の破壊プロセスを進行中、などという現状を考えれば、これからの自分の健康はできるだけ自分で守らなければならない。(裏に続く)

さらに「自業自得の人工透析患者(裏に続く)」

なんて、全員実費負担にさせよ！無理だと泣くならそのまま殺せ！」と（あとで引つ込めたが）発言した元アナウンサーの長谷川豊という男が「日本維新の会」の公認で七月の参院選に立候補をするという話しまである。本当にこの国の政治は、墮落しきつてきた。

しかし自分の健康は自分で守るというのは必須だが、それにも限界がある。国民の健康と命を守る政治へと、国の政治を転換させていくことが、真に必要なと感じる。そのためには、この七月の参院選の野党共闘を、ぜひとも実現しなければならぬ。

芥川だより一四七号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 61	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談 11	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 23	下村嘉明	6
大人の今昔物語 55	石川吾郎	7
B級サラリーマン渡世譚 69	明石幸次郎	8
オクラの山たより 31	因了生	9
隠された歴史 6	満田正賢	13
孫ウオッチング 27	福田圭	16
レクイエム	古城悠	16
編集後記	嘉	17
ふみの道草 10	山椒魚	18
俳句	土田裕 影山武司	18

素老人☆よもだ帳 (61)

坂本 一光

◆そうきましたか

四月一日、政府は「新しい元号は令和であります」と発表した。出典は万葉集。天平二年（七三〇年）正月十三日、大宰師大伴卿の宅の宴の梅花の歌三十二首に付された序の文言からの引用だと言う。

「時に初春の令き月、気淑く風和み、梅は鏡の前の粉を披き、蘭は珮の後の香を薫らす」佐佐木信綱編、『万葉集』岩波文庫（上巻）、二二七ページ、二〇〇〇年第九十五刷）

安倍首相は会見で『万葉集』は……我が国の豊かな国民文化と長い伝統を象徴する国書であります」と述べ、これまでのような漢籍からの引用による元号ではないことを述べた。しかし、発表に続くいささか、あるいは相当に過度の、騒ぎ過ぎ、あるいははしやぎ過ぎの報道においても、この序文の漢文には範となる漢籍があるとの専門家の指摘があった。当時の知識人の知識の源を考えればそれは当然の指摘であろうと思った。

いずれにしても、首相の会見の万葉集云々のところで、素老人は「あなた、そうきましたか」と思いテレビを切った。切ったけれども妙に気になる。「アベ政治を許さない」と毎月スタンディ

ングをしている素老人としては、新元号発表と言う願ってもないこの機会に、あのお喋り総理が何を言ったか、見て見たくなった。本稿では、新元号発表に伴う首相会見の冒頭発言と質疑応答のなかでの発言の主な部分を、インターネットに発表された通りそのまま引用する。安倍政権の後方支援になるかどうか、読者諸賢にはしかと見ていただきたい。

予断を与えるかもしれないが、素老人の感想は、「巧言令色、鮮なし仁」である。そうではなく、新しい時代に光を見る人も当然いるだろう。元号と同じくその判断は強制するものではないと考え、これ以上のコメントは控える。引用は首相官邸ホームページからである。

◇安倍総理冒頭発言（全文）

本日、元号を改める政令を閣議決定いたしました。新しい元号は「令和」であります。

これは「万葉集」にある「初春の令月にして 気淑く風和ぎ 梅は鏡前の粉を披き 蘭は珮後の香を薫す」との文言から引用したものであります。そして、この「令和」には、人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つという意味が込められております。

「万葉集」は、一二〇〇年余前に編さんされた日本最古の歌集であるとともに、天皇や皇族、貴族だけでなく、

く、防人や農民まで、幅広い階層の人々が詠んだ歌が収められ、我が国の豊かな国民文化と長い伝統を象徴する国書であります。

悠久の歴史と薫り高き文化、四季折々の美しい自然、こうした日本の国柄をしっかりと次の時代へと引き継いでいく。厳しい寒さの後に春の訪れを告げ、見事に咲き誇る梅の花のように、一人一人の日本人が明日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせることができる、そうした日本でありたいとの願いを込め、「令和」に決定いたしました。

文化を育み、自然の美しさをめぐることができる平和な日々にかかる感謝の念を抱きながら、希望に満ちあふれた新しい時代を国民の皆様と共に切り開いていく。新元号の決定に当たり、その決意を新たにしております。五月一日に皇太子殿下が御即位され、その日以降、この新しい元号が用いられることとなりますが、国民各位の御理解と御協力を賜りますようお願いいたします。

政府としても、ほぼ二〇〇年ぶりとなる歴史的な皇位の継承がつつがなく行われ、国民こそぞつて寿ぐことができるよう、その準備に万全を期してまいります。

元号は、皇室の長い伝統と、国家の安泰と、国民の幸福への深い願いとともに、一四〇〇年近くに渡る我が国の歴史を紡いできました。日本人の心情

に溶け込み、日本国民の精神的な一体感を支えるものとなっています。この新しい元号も広く国民に受け入れられ、日本人の生活の中に深く根差していくことを心から願っています。

私からは以上です。

◇質疑応答における安倍総理発言（抜粋）

我が国は、歴史の大きな転換点を迎えています。いかに時代が移ろうとも、日本には決して色あせることのない価値があると思います。今回はそうした思いの中で歴史上初めて国書を典拠とする元号を決定しました。特に「万葉集」は、一二〇〇年余り前の歌集ですが、一般庶民も含め地位や身分に関係なく幅広い人々の歌が収められ、その内容も当時の人々の暮らしや息づかいが感じられ、正に我が国の豊かな国民文化を象徴する国書です。これは世界に誇るべきものであり、我が国の悠久の歴史、薫り高き文化、そして、四季折々の美しい自然、こうした日本の国柄はしっかりと次の時代にも引き継いでいくべきであると考えています。

同時に、急速な少子高齢化が進み、世界がものすごいスピードで変化をしていく中で、変わるべきは変わっていかねければなりません。平成の三十年間ほど、改革が叫ばれた時代はなかったと思います。政治改革、行政改革、規制改革。抵抗勢力という言葉もありましたが、平成の時代、様々な改革がしばしば大きな議論を沸き起こしま

した。他方、現在の若い世代、現役世代はそうした平成の時代を経て、変わることに、改革することをもっと柔軟に前向きに捉えていると思います。ちょうど本日から働き方改革が本格的にスタートします。七十年ぶりの労働基準法の大改革です。かつては何年もかけてやっと実現するレベルの改革が、近年は国民的な理解の下、着実に進むようになるってきたという印象を持っています。

そうした中で、次の世代、次代を担う若者たちが、それぞれの夢や希望に向かって頑張っている社会、一億総活躍社会をつくり上げることができれば、日本の未来は明るい、そう確信しています。

新しい元号の下、一人一人の日本人が明日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせることができる。そういう時代を国民の皆様と共に築き上げていきたいと思っています。

本日の会見は、インスタグラムやツイッターで生中継をされていますが、今の若い世代の皆さんは、こうしたSNSなどの新しいツールを見事に使いこなすことで、どんどん新しい文化をつくり上げています。ニコニコ動画も既存メディアの発想にとらわれることなく、若者たちならではの柔軟さで多様な番組を生み出して、リアルタイムで個人がコメントを発信できる、新しいメディアの姿を形づくられたところ、こう思っています。

こうした若い世代の新しいムーブメントは、確実にこれまでの政治や社会のありように大きな変化をもたらしつつあります。本当に頼もしい限りであると思っておりますが、日本の未来を明るく感じています。新しい時代には、このような若い世代の皆さんが、それぞれの夢や希望に向かって思う存分活躍することができ、そういう時代であってほしいと思っています。この点が、今回の元号を決める大きなポイントでもありました。

今回の元号は、「万葉集」にある梅の花の歌三十二首序文からの引用です。この中では、厳しい寒さの後、春の訪れを告げるように見事に咲き誇る梅の花の情景が美しく描かれております。平成の時代のヒット曲に「世界に一つだけの花」という歌がありましたが、次の時代を担う若者たちが、明日への希望とともにそれぞれの花を大きく咲かせることができる。そのような若者たちにとって希望に満ちあふれた日本を国民の皆様と共につくり上げていきたいと思っています。……

（かたちは心であり、心はかたちになる

■大分の素老人

哲学命いの時事放談（11）

祖蔵 哲

印度旅行記（後編）

このインド旅行記は最初前後編と二回で書く予定であったが思わぬほど長くなってしまった。たったの一週間の短い旅行でインドの全てが理解できるはずがないが、それでも垣間見たインドの現実には新たな思索の道を広げた。さて、最終回の後編は六日午前前のデリーでのタージ・マハルに影響を与えたと言われているフマユーン廟などのイスラム建築物の見学に引き続き午後の行程から始まる。

（1）マハトマ・ガンディーの今

印・戦争さなかの一九四八年一月三〇日午前、国民会議派に対する提案をピルラー邸で書き終えたガンディーは、その後、タベの折衝会に向かった。「そのとき、ひとりの若者が人込みをかきわけてガンディーに近づいた。若者はガンディーの前にぬかずくようにひざまずくと、ガンディーの心臓をめがけてピストルを三発発射した。ガンディーはそのまま、くずれおちるように倒れた。おお、神よというつぶやきを残して」（付き人の回顧録）。ガンディーを暗殺した若者はマハラ・シュトラのバラモンであり、ヒンドウの右翼組織の一員だった。パキスタン分離でのガンディーのムスリムへの態度があまりに寛容であることに強い不満を

いだしていたのだ。その暗殺された地、ビルラー邸がガンジー・スムリティ博物館となっている。デリー西部にあるこの場所を六日目の午後訪れた。

後年のガンディーはデリーではここビルラー邸で滞在するのが常であったという。ビルラー家といえは現在でもインド三大財閥の一つである。他の二つはゾロアスター教を祖先にもつタタ・グループとリライアンス・グループである。マハラジャの国インドは今では財閥の国になっている。この三大財閥も長い相続争いの結果、現在は新興財閥が台頭してきているとか。なぜ清貧、純潔を尊ぶガンディーが財閥という最も世俗的なものから庇護を受けていたかといえ、それは経済的にも大きな影響を意味するインド独立運動とのかかわりである。

ガンディーは一八六九年、インド西部でヒンドゥー教商業カーストに生まれた。一八歳の時に弁護士になることを目指しイギリスに留学する。イギリスで弁護士資格を取りいったん帰国するが、本国での弁護士活動がうまくいかずに成功したインド人商人の依頼で南アフリカに渡る。当時の南アフリカはダイヤモンドが発見され多くの奴隷状態でインドから連れてこられた労働者がいた。ここでインド人が白人から差別を受けているのを身をもって体験した。そして差別撤廃運動にかかわる。これがガンディーの抵抗運動の原点である。

しかし、現在ではこのアフリカ時代での活動が大きな問題となっている。去年二月ガーナ大学に設置されていたガンディーの像が撤去されたというニュースには驚いた。世界的人望の熱いガンディーに何があつたのか。この像は二年前、当時インドの大統領だったムカジー氏が、両国の友好関係の象徴として首都アクラのガーナ大学に設置したものであつた。

しかし大学教師らは直後、インド人がアフリカ系の黒人より「はるかに優れている」と記したガンジーの文章の一節を取り上げ、像の撤去を求めたのである。確かに当時はインド人も奴隷状態であつたが、アフリカ人はそれ以前から奴隷として労働させられていた。「ガンディー黒人差別主義者」という根拠は当時イギリス政府に抗議として送った文書に黒人差別用語「カファイア」という言葉を使ったということらしい。そういうことであればガンディーの無配慮ということになるうが事情は複雑である。現在世界は価値観の第二の変革時期にはいつて来ているように思われる。二度の大戦後の価値観の再変更である。本国インドでさえガンジーは再評価の対象となつていく。周りのインド人に聞いてみると多くの人は彼だけが英雄ではないという。今インドのモディ首相率いる政権はヒンドゥー至上主義のインド人民党である。経済の成功を背景にナショナリズムに回帰している。これこそがガンディーが問題にしたことで

ある。ガンディーが関係したインド独立問題の未解決問題は現在まで引き継がれている。印パ問題、すなわちパキスタンとの関係である。

話は今回のインド旅行からの帰国一ヶ月後のことに飛ぶが、インドに関する国際ニュースが入ってきた。パキスタン軍は二月二七日、カシミール地方の自国領空内でインド空軍機二機を撃墜し、墜落した操縦士二人を拘束したと発表した。

私たち日本人にとつて、正直、中東や西アジア問題に関しては関心も薄いし歴史的知识も乏しい。しかし、これらはすべて西欧植民地主義時代の未処理問題である。パキスタンに関して言えば、もともと先ほどの地政学的にはインド亜大陸に属するため一つのインドであつたのである。一九世紀には英領インドとしてインドと同一の政府の下に置かれており、独立運動も本来は同一のものであつた。しかし、独立運動の中でイスラム教徒とヒンドゥー教徒との対立が深まり、イスラム教徒地域を「パキスタン」として独立させる構想が浮上した。これを避けるための努力はガンディーを中心に独立寸前までなされたものの、最終的にはヒンドゥー教徒地域がインド、イスラム教徒地域がパキスタンとして分離独立をすることとなった。この時にガンディーのつた行動がヒンドゥー至上主義にはイスラム教に寛容すぎるとされ、かの暗殺事件が起きたのであるが。結局、インド東部がイ

スラム多数派地域の東ベンガル州としてパキスタンに組み込まれ、翌年55年に東パキスタンとなったものの、遠く離れた両地域を宗教のみで統一しておくことは困難であり、やがて東パキスタンはバングラデシュとして分離独立の道を歩むこととなった。この時からの対立が今も尾を引いているのである。しかし、このパターンはどこかでも聞いた話によく似ている。そう、「アラビアのロレンス」でのイギリスの「ダブルスタンダード」である。第一次大戦でのオスマン帝国分割でのアラブ側と占領国側の相矛盾する協定のことである。さらにこれは現在のイスラエルの問題での火種にもなった。この手の西欧型外交戦略は今も繰り返されている。余談であるが、イギリスといえ、現在の最大の問題は「ブレクジット」(EU離脱)である。この交渉は難航していてイギリスは窮地に立たされている。しかし、よく考えてみればこのパターンはインド独立交渉と逆の立場である。当時のイギリスは狡猾な外交政策により自国の利益になる独立を与えた。これに比べて現在の立場は逆である。歴史は皮相的に繰り返す。

さて、そんな現代的背景をもつガンディー博物館、といっても元個人邸宅であるから記念館というほうがふさわしいが、その前庭がある建屋の入り口にはこんなメッセージが、「My life is my message 私の生き方そのものが私の伝えたいこ

と」。彼はたくさん名言を残しているが、自分で実践していたからこそ普遍的に真実なのだ。室内には数多くの写真や彼の言葉があった。裏庭にでると通路に足跡が型取られ続いている。そしてその数メートル先には暗殺地点のモニュメントがあった。

次に向かったのはこの暗殺地点より約五キロほど北東のヤムナー川沿いにあるラージ・ガートと呼ばれるはガンディーが火葬された場所だ。到着したがあいにくの閉館日、残念ながら中には入れなかった。柵越しに見ると敷地は公園になっていた。ヒンドゥー教の教えでは、死者は火葬され、遺灰はガンジス川に流されるため、墓は造らないというのが原則だ。しかし、さすが、ガンジーほどの人物ともなると少し様子が違うようで、この地で荼毘に付されたあと、ヒンドゥー教の伝統に従い、遺灰はガンジス川に流されたが、火葬された記念の地には黒大理石の慰霊碑を設けた。正確いうとこれは墓ではないのだろう。

(2) 国家財政浪費タージマハルの今
タージマハルといえば多くの人は、世界遺産、イスラム建築、白亜、左右対称、そしてお墓を連想するだろう。

その通りであるが以外とどこにあるのかは関心がない。インドは七世紀頃からイスラムの侵入に悩まされていたが、十三世紀にデリー＝スルタン朝というイス

ラム政権が北インドを中心に成立した。十六世紀にはモンゴル系のイスラム政権によりムガル帝国が建てられるが、その三代皇帝であるアクバルの時代にアグラを都として定められた。五代皇帝のシャール・ジャハーンは、愛妃ムムターズ・マハルの死を嘆き、この街にタージ・マハル廟を建てたのである。しかしその死の原因が十四人もの子を出産のためとも聞くと複雑な納得感が湧いてくる。タージとはペルシャ語で王冠の意味。デリーから南へ列車で三時間程の距離である。

もうすっかりインドのカオス集積地としての駅舎には慣れたが、横たわっている人を踏まないように駅のホームに出て、到着の列車を待った。以外と定刻通りに乗車でき、アゴラの駅に到着し二キロほど西のヤナムー河のほとりにあるタージマハルにバスで向かった。ここでも入場ゲートまでは電気カートで移動のため手前でバスを降りる。実際、白亜の大理石が排気ガスのために侵食されているのだとか。喘息や気管支炎、人間への影響の方がもっと深刻であると思うのだが。例によって嚴重なボディチェックを受けて中に入ると、まずは白ならぬ赤砂岩作りの堂々たる正門を見る。主役はこの奥に鎮座している。ただならぬ演出である。その門を通ると、あのお馴染みの白亜ドームが。ここまで演られると感動というより「うさん臭さ」を感じるのは爺だけであろうか。区画された庭園の真っ直ぐ

に伸びた水路が建物を左右対称に区切る。これが「美しい」と感じさせられるのは、本心からそうなのか。東洋そして日本の庭園や建物にこのような美は見つからない。私たちはどうやら違う尺度で美を感じるようになってしまったのか。多くの世界遺産の美はその基準そのものが世界基準とされているものを尺度にしている。南インドにはそんな基準に適合しない古代遺産が数多くあるとか。一度、訪れてみたい。そして、ここではたくさんさんの観光客が記念写真をとっている。最近はいんスタというSNSでの画像取りが流行らしく、何やら奇妙なポーズの人だらけである。まあ、このような行為が似合うような墓碑になってしまったのは建設者には不本意であろうが仕方がないのだろう。縁日の沿道みたいな混雑の前には水路に沿って二〇〇メートルくらい歩くと廟の正面に来る。靴を脱いで中に入る。建物は基本的に一階がベースになり、二階の左右にモスクが設けられている。しかし大部分を占める一階のやたらに天井

が高い内部には皇帝と王妃の棺があるだけであとは何も無い。壁面を飾る全面の繊細なモザイクタイルの装飾には圧倒されるが。

さて、ムガル帝国では跡継ぎ争いが激しく、自分の子の間でも骨肉を争い、王として立つ者以外の継承権を持つ者を皆殺しにするまで戦ったという。皇帝が推す第一皇子と、実力派第三皇子の間に起

きた激しい争いの結果、第三皇子が皇位に就き、父親であり廃位されたシャー・ジャハーンは幽閉されてしまった。こうなるとこの廟は単なる無駄遣い、浪費の象徴。父親皇帝の死後は棺はタージマハル廟にはなかったとか。今はきつちり母親である王妃の棺の隣に並んでいる。一応は、墓であるから写真撮影は禁止となっていた。その父親が幽閉されていたのがアグラ城。そこへ向かう。

アグラ城は第三代皇帝アクバルによって、十六世紀後半に完成した強大な要塞だ。その後第五代皇帝シャー・ジャハーンまでの三人の皇帝の居城となり、赤砂岩でできた重厚な城壁で囲まれるため、「赤い城」と呼ばれている。城塞内の「囚われの塔」に死ぬまで八年間も幽閉されたシャー・ジャハーンだが、部屋から見ていたのが、川の向こうにあるタージ・マハル。どのような気持で白亜の廟を毎日眺めていたのか、われら庶民にとつては、囚われとはいえ超豪華、想像の域を超えていた。

このような単なる権力争いと無駄遣いの「負の遺産」が今や観光収入財源の「正の遺産」へ変貌。このような例はドイツのニーランドのシンデレラ城のモデルとして世界中から観光客が集まるドイツのノイシュバンシュタイン城とよく似ている。愚帝変じて賢帝へか。

(3) 哲学は世界を変えられるのか

インド滞在最終日七日目、ここアグラ城の見学を最後に二〇時三〇分発の日本行き飛行機に乗るため再び列車でデリーへ戻る。インドへ初めて来たときと同じようにあたりは夜になった。インドに来る以前の私、インドに足を踏み入れた時の私、この短い体験の直後の私、そして日本にかえって再び日常に戻った私。これらが同じ私であるのだろうか。それはインドという未だに未知の世界の中では同一ではない。私たち日本人はあまりにも西欧的世界観に侵食されすぎている。つまり、主観と客観が分離した二元論の世界観である。今や、自分が感じることを思うことは多分に新聞や学問で知らされてきたことと合致していなければ生きていけない。太陽はいつも東から昇るが、それは地球が廻っているからであると。そうでない世界観がインドには現在も存在する。

世界をめぐる体験すると、西欧的世界観から外れた文化はまだ数多くのこっている。しかし、西欧的価値観や世界観からはその文化は何も見えないし、そしてそのことは「文化が存在しない」と同じ意味になる。そして、たとえその異質な文化を知り得たとしても、それは西欧的論理尺度を通しての理解である。ただ普遍的人間には共通の論理基準があれば話は別であるがそれがあるのかどうか。そのような想いで一〇時間のフライト。もとの日常生活へ、日本に戻った。

さて、インド旅行から戻って数日後、かつて手を染めていたインド哲学の本を数冊読み返してみた。すると当時とまた違った理解の道が開かれるような気がしてきた。インダス文明の原インドに侵入してきた謎のアーリア人がもたらした支配原理としての「ヴェーダの思想」は厳格化され「ウパニシャッドの思想」を生み、そしてその支配思想に反抗する仏教などの「六師外道の思想」が対立した。これらの多くは「商業階級」の人々であり、それ以前の「支配階級―僧侶、貴族」との対立は「産業経済の発展」が影響したのである。そのような反撃をうけた「正統の思想」である「バラモン哲学」は「六派哲学」として「実在論」を争うことになる。この哲学は西欧哲学に勝る理論的かつ合理的な哲学をまた生み出したが、同時にアーリア侵攻以前に土着に深層していた「自然宗教」と結びつき「ヒンズー教」としての宗教としても蘇る。その後のイスラム、モンゴル、イギリスという侵略、植民地という長い歴史のなかでもこの思想は滅ばなかった。その原因は何なのか全く不思議である。さらにまた、逆に現在の西欧的世界の危機にあり、このインドの思想が未来を開くかという予想と現実も見えてきている。もちろん「階級差別」の固定を前提とする「運命、宿命論」が規範となることはないであろう。しかし、カースト制度という身分制度はなにもインドだけの特有

の制度ではない。西欧哲学の起源とされる古代ギリシャ、ソクラテスやプラトンの時代においてもポリスの民主制は奴隷制度が支えていた。西欧文明はつい最近の二十世紀までは植民地支配という奴隷制度の下で思想を形成していたのである。確かに制度としての奴隷制はなくなったが固定化された階級差別はまだまだ全世界を覆っている。インドはこの旅行で体験したようにカースト制度は目に見える形で残っている。インドが変わるのか、世界が逆行してこの制度に戻るのか。未来は混沌としている。哲学や宗教が世界を救えるのか、はたまた逆に人間を支配するのか。この旅行の短い体験は大いなる示唆を私に与えた。

(完)

大峯奥駈道(23)

下村 嘉明

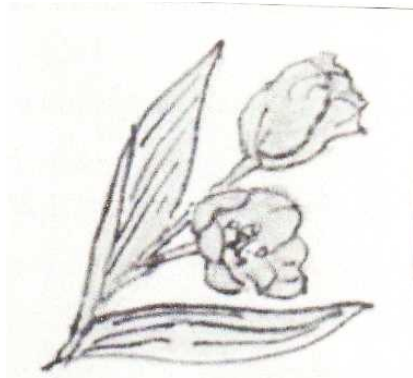
釈迦が岳の下りで多くの修験者とすれ違い清々しい気持ちになったのだが、足腰は疲れ果てていた。釈迦が岳から今晚の宿である弥山小屋までコースタイムでは五時間半である。

私は、弥山までは行けないと思ったが言えない。吉野を目指して頑張っている二人に自分の体力不足で計画変更を申し出るのは非常に申し訳ないからである。もとはと言えば、私が言い出した計画で自信满满で登り始めたからである。

しかし、歩きながら私は考えた。私の歩くペースでは弥山小屋へ着けたとしても夜中になる。三人とも初めてであることを考慮すればなおさら危険だ。

弥山と釈迦ヶ岳の間にある楊子ヶ宿小屋に泊まるのが妥当だと考えた。しかし、私たちは、小屋泊りの装備しか持っていないので困ることになる。シュラフもなく食事も作れないから非情食を食べなければならぬ。

また、弥山小屋には今晚の予約をしているので、到着しなければ小屋の主人に心配をかけ食事の用意も無駄になる。早くキャンセルの連絡をしなければならぬが、携帯が圏外でつながらない。二人の家族も弥山小屋からの電話を待っているはずだ。ここは頑張って弥山まで行くしかないのだが、今の調子では事故を起こす危険性すら



ある。

私は、いろいろと考えたが、疲れ切った身体には勝てないので二人に言ううことにした。楊子ヶ宿小屋に着いたときに、二人に対して「誠に申し訳ないが、とても弥山までは行けそうにない。この楊子ヶ宿小屋で今晩は泊まりたい。」というとなんと驚きの表情になった。「まだ、時間も早いし行きましょう。予約もしてますし」

「確かに時間はあるが、私の足では無理だと思ふ」何とかこの小屋で泊ってほしい。頼むわ」と無理やり二人に承諾してもらった。車二台で来ていなかったら、二人と別行動も可能なのだが、それは出来ないから渋々納得してもらった。

この時に車二台で来て、登山口と下山口に止めたことを悔いた。電車で来ていれば別々に分かれて行動が出来たのに。まあ、いろいろと心配はあるが、一番の心配は水が小屋近くにあるかということだ。稜線上で水がなければ、水を飲まずに一夜を過ごし、翌日も歩かなければならない。こんな状況になれば遭難状況に近い。

幸い、小屋に着いたのは昼過ぎだったので、地図にある水場を探して樹林の中を二〇分ほど行くと山の斜面にぬかるみがあってポタポタと滴が落ちていた。早速ペットボトルを水滴の下に固定した。少し時間はかかるが、水の心配はなくなった。

私は、三リットルほどの水を小屋へ持ち帰り、二人にも水場の様子を説明した。次は、晩飯が問題だ。私が持て来ていた乾燥

米のジフィーズが五食分あるので、これを提供することにした。水でも一時間ほどつけて置けば、食べられるはずだ。

次は寝袋の問題だ。小屋には薄いマットがあつたので借用する。持っている衣類や雨具をすべて着て寒さを防げば何とかなる。いろいろと考えて少し落ち着いた。とにかく疲れていたもので、小屋の板場にザックを敷き昼寝をすることにした。

ほかの二人は、何とか小屋に連絡しようと思つて行つた。奥駈の稜線は携帯電話のつながらない圏外が多い。かなりしてから二人が戻ってきたが、やはりつながらなかったみたいだ。二人はひどく落胆し心配をしていた。弥山小屋の人が遭難したのではないかと心配するだろうし、家族の者たちも電話がないので心配する。

私は、まあ、明日になれば弥山に行けるし小屋にはキャンセル料を払い、留守家族にも電話が出来るから大丈夫だと無責任ながら二人に言った。

三時ごろに若い人が一人、大きなザックを担ぎ小屋に入ってきた。なんでも奥駈の避難小屋巡りをしている地元の人であつた。公務員関係の人で大きな猟犬を連れていた。今夜はこの小屋で泊ると言つて食料と調理器具を取り出し、食事の用意を始めた。私たちがジフィーズを取り出し水を入れようとしたのを見て、彼は自分で沸かした湯を提供すると言つてくれた。やつぱり山の女神がいた。

大人の今昔物語 (55)

石川 吾郎

今回は、灯りにぼんやりと姿が浮かんだ女が、言い伝え通りにまもなく死ぬ、という不思議な話。しみじみした趣きがあります。教科書に出ない度は、二／五。燈火に影が映つて死んだ女の話(巻第三 一第八)

今は昔、高貴な女御のもとに伺候する若い女房がいた。小中將の君といつた。その顔立ち・姿形は美麗で、気性も良かったので、同僚の女房たちの評判もよく、この小中將を愛すべきものと見ていた。

とくに定まつた男もなかったので、美濃守・藤原隆経が、ときどき通つていた。

この小中將、薄紫の衣に紅の単衣ひとえを身みにまとい、その女御のもとに仕えていたが、ある夕暮れとき、燈火を灯したその火に、薄紫の衣に紅の単衣をまとつた立姿の小中將が、口を隠した目元、額つき、髪の下がりぐあいなどまで、実物と何一つかわらぬ姿で浮かび上がった。これを見た女房たちは「よお似てはる」などと言ひ交わしてざわざわしている。その中には特にこのような現象について知識をもつた智者もいなかったもので、ただただ集まつておもしろがつて見ているうちに、やがて灯心を掻き落とし燈火を消すと、その姿も消えてしまった。

*

後になつて「こんなこと有りましたえ」

など、小中將に語り教えると、「なんや氣味わる。早う消さんと、いつまでも見てはつたん、氣いはずかしい」と小中將は嘆く。そののち年長の女房たち「あれはほんに忌むべきです。この公達きんたちが人にそのことを教えんと、灯心を掻き落としてその場をおさめたんどす」などと言つていたが、この話はそのうちに話題に上らなくなつていった。

さてそれから二十日ばかり経過し、この小中將、病にふせるようになった。二三日は局に伏せていたが、状態が重くなったので、里へと退出をしていった。

*

そうするうち藤原隆経、他のついでに女御の局にやつてきて小中將に会おうとして使ひの童に尋ねたが「ただ今、お里にお歸りです」との答え。さつそく小中將の実家を尋ねて出掛けたが、七八日目の月が西に傾いた夜更け、西向きの妻戸のある家に、小中將が中から出てきた。隆経は妻戸を押し開けて、夜明け前には出掛けるので見舞つただけで歸ろうとのつもりであつたが、小中將の有りさまを見ると、普段よりもしみじみと愛おしく思われ、また小中將の方も心細げですこしやつれた様子であつたので、隆経は歸るに忍びず留まつて供養をした。

終夜、二人は語りあつて、暁に歸るのも歸り難かつたが、やがて夜も明けるころ歸つてきた。道すがら小中將のことが

心にかかり、自宅に着くと「あなたが気がかりだ。またすぐに帰る」と書き送った。小中將からの返事を心待ちにしたが、ようやく届いた手紙を開いてみると、ただ「鳥部山」とだけ書きつけてある。これを見て隆経は、胸騒ぎがして、その手紙を直接肌につれるように懐にいれ、所用のために京を旅立った。その道々この手紙を取りだしてよく見れば、筆跡も見事であった。

さて目的の地で所用はそこそこにして、隆経はこの人恋しさに京に急ぎ帰ってきた。京に着くと、まずかの女のところにまず駆けつける。すると、その家から人が出てきて「すでに小中將は亡くなりまして、昨夜鳥部野に葬ったところでございます。」と言う。これを聞いた隆経は、喩えようないほど心乱れるのであった。

こういうわけなので、人の姿が燈火に映じて立ち現れた場合には、その燃えかすを掻き落として、必ずその人に「すかさず」べきである。またよく祈ることも大切である。よくよく忌むべきことであることに気づかず、対処を怠り、ただ掻き落としてしまうようなことがあれば、その咎めがあり、死んでしまうのだ、と言われているということだ。

《コメント》

この話は物語としては不備なもので、状況を把握することがなかなか困難です。燭台の燈火に姿が浮かびだした人物はや

がて死ぬ、という言い伝えが背景になっているように思われます。描写は不十分ですが、女を思う隆経の気持ちの深さは想像が出来る気がします。

こんな未完成な物語を載せているのも「今昔物語」の一つの魅力と言えるのではないかと思います。さらに言えば本文が途中で失われていたり、表題だけで本文が全くない話もあり、こういう場合も表題や欠落部分から、かえって想像が掻き立てられる気がしてくるのです。

なお「鳥部山」は、平安京の最大の葬送の地として有名で、死者を放置する風葬も行われていたようです。現在の清水寺より南の一带あたりになります。



B級サラリーマン渡世譚 (69)

明石 幸次郎

韓国編 (担当者の役割その2)

専務室を出て二人は自席に戻った。M居は何か気になったのか明石が席に座ると同時に「明石、専務に何か言われたか？」と質問をしてきた。

「まあ、K田部長から、私を急遽出張させなければならぬ理由を説明されて下さいと依頼されました。その理由は鄭さんに、私がソウルに向き価格、納期等の話をするので、早く決着させる為に、鄭さんにも交渉に同席するよう、専務の方からお願ひして欲しいと言う事でした。専務は直ぐに電話をして、要請しておくことでした。私には交渉は押したり引いたりして、しつかりやって来てくれと言われました。それだけでしたか……」と答えると、何か自分の事を言われたのが気になった様で「それだけか？何か、俺のことは話題に上らなかつたか？」と言ったので「いいえ。特にM居さんの話は無かつたですが、K田部長は、鄭さんが納期の話を又、輸出部を頭ごなしで宇都宮工場に電話する事が無いようにと専務に釘を刺してもらいたかつた様子でした」と専務とのやり取りを伝えた。

その時、S田専務がK田部長の席に来て「K田さん、鄭さんに電話をしておき

ました。明石君を出張させ、早く価格を決めないと工場も部品の手配が出来ず納期が遅れる。鄭さんの立場を守るように出来るだけ納期を早める為に、今回の交渉で結論を出して欲しい。その為にソウルに向いて、交渉に同席して貰いたいと、伝えました。スケジュールを調整して出来るだけ同席して話を聞くと云ってました。それと、久保商事の金さんに同席して、通訳して貰った方が良いので、私の方から依頼しておきましょか？」と言うとK田部長は

「金さんには、口銭の増額の話もありますので、私の方から電話して、同席して貰う様に依頼致します。既に明石さんの方からもスケジュールと今回の目的をテレックスで伝えているようです」

「了解しました。金さんの口銭は配慮してあげて下さい。M商事以上の働きをしてもらっている様に聞いていますので」と言つて専務室に戻って行つた。

明石は急いで金さん宛の親書の草案を作成しようとA4の用紙に書き出した。

その時、「明石さんくちよつ」とK田部長が呼んだが、明石はどう書いたら良いかと考えていたので聞こえなかつた。G本嬢がその声を聞いて「明石さん。部長が呼びですよ」と言ってくれたので、明石は直ぐに立ち上がり部長席に向かつた。

机の前に立つと「そのパイプ椅子に座ってくれ」と言われたので椅子に座ると

オクラの山たより (31)

困生

「今、専務が報告に來られ、こちらからの要望を鄭さんに電話で伝えられたという事であった。先程も話したように、打ち合わせには鄭さんに同席して貰った方が結論が出やすい。価格決定権は輸入課にあるというものの、製造本部長の鄭さんの意見は価格決定に大きな影響力を持つのでなあ。君の交渉のストーリーで、専務が言われた様に押し引きしたりして、最低一〇パーセント、願わくば、それ以上で決着するようにお願いしておく。君はまだ、分らないと思うが、金さんの口銭も配慮しないといけない。M商事の口銭を削つても金さんの方に回したいと考えている。それで、君のサポートとして、わたしの方からも金さんに電話しておくので、交渉に通訳として同席して貰うと共に、D工業の金社長への当方の説明もお願いしておくので、金さん宛の親書とやらを、三〇分ほど書いて見せて欲しい。それが終わったら、六時頃を目標に歌舞伎座裏の店で一杯やろう！では、宜しくなあ」

と言われたので、席に戻るや否や頭を抱えながら、ペンを走らせ草案を何とか三〇分以内に書き終えた。

M居に草案を見せて意見を求めようと思つたが、既に終礼のベルが鳴った途端に「先に帰るわー」と言つて帰宅した様子であつたので、指示された6時前に直接、K田部長に草案を持って行つて見せた。

K田部長は早く飲みに行きたいという気持ち強いのか、明石の書いた草案を読んで「良し。これで行こう。後は、君が金さんに会つた時に直接、君の口から工場の事情をよく説明して、その上で、金さんに金社長に説明をして、納得してもらおう。一足先に歌舞伎座の前でH川さんと待っているの、直ぐに片付けて来れるかなあ？」と予想に反してあっさり草案に訂正が入らずに原文通りで了解して、周りの社員に「お先に帰ります！」と言つて席を立てて部屋を出て行つた。

明石は自席に戻り、机の上にある資料を机の引き出しに入れて、片付けようとしていたら、N川が「明石さん、部長に誘われたのですか？」と聞いてきたので「そうなんや。急に6時に歌舞伎座の前で、H川さんと待っているのと言われた」と言つと「わあそれは大変ですね。今日の内には絶対、家に帰れませんよ。酒豪二人相手とわ、覚悟された方が良いでしょう。それに遅くなると奥さんに電話をしておいた方が身の為ですよ。K田部長と飲みに行くとは日はちが変わりますからね。ハッハッハ」と笑いながら助言をしてくれた。

一

残念ながら筆者はまだ行つたことはいのですが、今、高野山には信じられぬほどの参拝者が押し寄せているようです。参拝者といつても信仰でやってくる人は多分まれで多くは観光客でしょう。外国からの観光客も多いですから、今頃は閑静なはずの境内はビックリするほど賑わっているにちがいありません。

この高野山を開いたのはもちろん弘法大師こと空海ですが、仏教の教えにはまったく暗いので空海の真言宗の宗旨についてはよく分かりません。

ただ、かなり以前に空海の漢詩を必要があつていくつか読んだことがあります。空海の詩文は「性霊集」に多くが収められています、次の一首はその一つ。いかにも僧侶らしい詩です。

後夜聞仏法僧鳥

閑林独坐草堂曉

三宝之声聞一鳥

一鳥有聲人有心

声心雲水俱了了

後夜にして仏法僧の鳥を聞く

閑林に独り坐す 草堂の曉

三宝の聲 一鳥に聞く

一鳥 声あり 人心あり

声心雲水 俱に了了

まだ明け切らぬ曉の静かな高野山の林の中、この庵室にひとり坐していると、ブツ・ポウ・ソウと三宝の声を唱えるかのように一羽の鳥の鳴き声が聞える。この仏法僧という鳥の声を聞くと人は誰でも仏心を持つようになれるのであろう。鳥の声、人の心、空を行く雲、流れていく水は一つに溶け合つて、はつきりと仏の教えを悟ることができるのである。

「ブツポウソウ」と鳴く鳥はコノハズク。この鳥の鳴き声は三河の鳳来寺が有名です。この詩は詩吟にもよく詠われているのですが、「朝に辞す百帝彩雲の間、千里の紅陵一日にして還る」といった激しいエネルギーを持った「唐詩選」の世界になじんでいる人の目から見れば、この詩は淡泊にすぎ、一読、粥でもすすつていく気分にもなるかもしれません。しかも線香の匂いがプンプンしてきそうです。この詩だけで空海の詩は仏教臭いとされては困りものなので、もう一首、紹介しようと思います。空海と深い交友関係にあつた小野岑守（七七八〜八三〇）が弘仁六年（八一五）正月十五日に陸奥守に任ぜられ陸奥に下向する際に、空海が彼に贈つた「歌」です。「歌」はもちろん短歌の歌ではなく漢詩の古い詩形の一つのことです。有名なものでは白居易の「長恨歌」があります。空海の作つた「歌」は「贈野陸州歌（野陸州に贈る歌）」。「野」は小野、「陸州」は「陸奥守」を意味して

いています。この「歌」では空海の該博な知識がいかにほどであるかを見ることが出来ます。さらには当時の中央政府からみれば最果ての地である陸奥国の情景が描かれている点でも興味深いものです。

最初に原文、その後に現代語訳をつけます。少し長いので一部を割愛した上で、いくつかに分割して紹介します。原文と訳文に傍線を施した部分が北方（古代の人にとっては東方です）の世界と関わりのある部分です。

日本麗城三百州、就中陸奥最難柔。
天皇嚇怒、幾按劍。相将幄中、爭馳謀。
往帝伐、今上憂。時時牧守不能劉。自古將軍悉啾啾。

日本には美しい国が三百もあるのに、その中であつて陸奥国は最も治めがたい地である。歴代の天皇は怒つて何度か剣を握られ、大臣や將軍は陣中で作戦計画を練つたものである。かつて天皇も征討し、今の天皇も憂えておられる。その時、その時の陸奥守は賊を滅ぼすことができず、昔より將軍たちはみな憂い嘆いていた。

鎌倉時代の頃まで人々は日本を東西に長い国であると考えていました。日本の北端は佐渡島、南端は喜界が島、西端は五島列島、そして東の端は津軽半島でした。最果ての国とされた陸奥国ですが、今の福島県、宮城県、岩手県、青森県を合わせたかなり広大な面積を持った国で、その国府は宮城県仙台市近くにある多賀城に置かれ

ていました。小野岑守が陸奥国に向かったのは弘仁二年（八一二）に文屋綿麻呂が蝦夷征伐終了を奏上し宝龜五年（七七四）以来三十八年間続いた蝦夷征服戦争が終わつて四年後、戦争終結からそんなに時間がたつてはいない頃でした。

毛人・羽人接境界。猛虎・豺狼処々鳩。老鷁目、猪鹿裘。髻中挿著骨毒箭、手上每執刀与矛。不田不衣逐麋鹿。靡晦靡明、山谷遊。羅刹流非人儔。時時来往人村里、殺食千万人与牛、走馬弄刀、如電擊。彎弓飛箭、誰敢囚。苦哉、辺人每被毒、歳々年々、常喫愁。

毛人や羽人と境界を接し、猛虎や山犬・オオカミどもがあちこちに群れているようである。年老いたカラスの目をしてイノシシや鹿の衣を着て、もどりに骨製の毒矢をはさみ着け、手にはいつも刀と矛を持っている。農業も織物もせず、鹿を追い回して昼夜の別なく山谷に遊んでいる。人を食う鬼のたぐいで人間ではない。時折、人里にやつて来ては人や牛を多く殺し食べている。馬を走らせ刀を振り回すことは雷が落ちるような素早さである。弓を引き、矢を飛ばすので、誰が彼らを捕えることできようか。苦しむことに辺土の人々は常に被害を受けて毎年いつも悩まされる愁いがある。）

陸奥国が毛人・羽人の地と境を接しているという言葉が注目されます。毛人も羽人も中国の古代の地理書である「山海経」に見える辺境のさまざまな野蛮人の

うちの一つです。

毛人は「えみし」と読まれ、真っ先にこの言葉が出て来たのは「宋書」倭国伝以来、東方の蝦夷をさす著名な言葉であったからでしょう。

「山海経」によれば毛人は全身毛むくじやうで野蛮な人たちであるとされています。話はわき道にそれますが、小野岑守の先祖に小野妹子の子で小野毛人（おののえみし　？く六七七）という人がいます。野蛮人の名称を名前に使うのは不思議ですが、他にも大化の改新のクーデターの時に死んだ蘇我宗家の蘇我蝦夷（毛人と書いた史料もあります）も「蝦夷（毛人）」を使っています。蘇我蝦夷については藤原不比等陰謀説があつて『日本書記』の中で、この言葉を使つて政治的な敗者である蘇我宗家をおとしめた」というのですが、小野毛人のほかに佐伯今毛人も「えみし」という名を持っていた例がありますから、にわかに信ずることはできません。「龍之介」と同じように強い人というイメージをつけるために東方の野蛮人という意味の語を使ったという説もあります。また、岩波の古語辞典では「アイヌが自分たちを呼ぶのに使つた男・人」という意味の *emichiv* を仮名で写しとつた語」とあります。どの説もなるほどと筆者が納得するだけのものではなく、つまるところよく分かりません。

また羽人は出羽国の人のことではなく、文字通り有翼人のことです。出羽国はも

ともと出端国とされ最端の地をからさらに境界の外に出た国という意味でありました。

この部分の記述で興味深いのは毛人・羽人たちが、もどりに骨製の「毒矢」をさしこんで着けているという点です。この「毒矢」の話は斉明天皇五年（六五九）の遣唐使が唐の皇帝高宗に披露した蝦夷の風俗を思い起こさせます。「新唐書日本伝」によれば、このとき唐の地に遣唐使とともに渡つた蝦夷の人（彼らは大和朝廷に服属した民として唐の皇帝に献上されました）は見事な射的の腕前を披露しています。空海はこの事実を何かの書で読んでいたのでしょうか。

よく知られているように北海道アイヌの人たちはかつて「附子」と呼ばれたトリカブトを用いた毒矢を使用し、命中しなくてもかすただけで大型獣を倒すことができたといひます。その起源についてはよく分かつていないのですが、空海が北方民族の毒矢使用を知つたのは、おそらく蝦夷の実際の使用例を見聞したわけではなく、やはり中国の古典からの知識によるのであろうと考えられます。ロシア沿岸地方以北に居住していたと古代中国が考えていた肅慎という民族の一派である勿吉、靺鞨らが「魏書」「隋書」といった中国の正史においていずれも毒矢を使用するという記述があります。空海がこれを読んでいた可能性があります。また、空海の「歌」には馬についての記

述もありますが、青森県東部から岩手県北部にかけての地域は「糠部郡」といわれ古来「糠部駿馬」につながる名馬の産地でありました。中国北方が名馬の産地であり、皇帝にその名馬が献上されたという記事は「魏書」に見られる記述です。

空海がたどった生涯を考えてみますと彼が美濃・尾張よりも東の方に行ったとも思われず、書物から得た蝦夷についての彼の知識の豊富さには驚くばかりです。「歌」はこの後しばらく都の人には嫌悪される辺境の地へ赴こうとする小野岑守への称賛が続くのですが、そこは飛ばして最後の部分を示します。

京邑梅花、先春開、京城楊柳、茂春日、
辺城春暖、無春藥、
無茂実、高天雖高、聴必卑、況乎鶴
響九臯出、莫愁、久住風塵裏、聖王
必封万户秩。

都の梅の花は春早く開き、柳も春に茂る。辺境の城塞ではなかなか暖かくならず、春の花もない。また冬は早く訪れて草木が茂って実ることもない。天皇は卑しい者たちのことまで耳にされる。ましてや鶴の声は深い沢のうちにあってもその声は天にまで届くという。しばらくは不穏な地にとどまることになろうが、憂えることはない。あなたの活躍は必ずや天皇の耳に届き、あなたの苦労は報われて十分な俸禄が与えられるであろうから。

見慣れない「薬」という漢字は「はなぶさ」という意味です。また「風塵」は

風に舞う汚い塵といった意味でここでは陸奥国のことです。陸奥国は汚れたところで春の花もなく草木も実を結ばない、というのは誇張した表現でしょうが、九世紀初めの都人にはあまり違和感もない表現であつたでしょう。

二

遠い東国の辺境に行こうとしている友人を激励している空海の「歌」ですが、これに対して小野岑守がこたえた詩があります。「文友」である空海などの人たちの返礼の詩です。題して「留別文友（文友に留別す）」。「留別」とは旅立つ者が見送る者に別れの気持ちをこめて詩を送ることです。

留別文友（文友に留別す）

一朝従吏十年許

文友存亡半是新

固為同道無新旧

但悲我作万里人

一朝吏に従ひてより十年ばかり

文友の存亡 半ばはこれ新らたなり

もとより同道たるに新旧なきも

ただ我の万里の人となることを

悲しむのみ

ひとたび官吏の道になってから十年ばかり、その間、詩文の友の生死をみると半分は新しく変わっている。もともと詩文の道と同じくする者であつてそこには新旧の違いはない。ただ自分は友に別れてこれか

ら遠い彼方の人となつて出かけねばならないことだけが悲しいのだ。

詩の中に官吏の身になって十年ほどたつたとありますが、岑守が官僚としてのスタートイえる権少外記（正七位上）となつたのが延暦二十二年（八〇三）のことですから、それ以来十年ほどという彼の経歴は歴史的な事実です。

陸奥守は五位相当の官職ですから、当時としてはかなりのスピード出世です。

実をいえば陸奥守に補任される直前の弘仁五年（八一四）岑守は日本最初の勅撰漢詩集「凌雲集」の編纂を清原清公（きよとも）らとともに嵯峨天皇の命により行っています。この「凌雲集」の序文を書いたが岑守ですから嵯峨天皇お気に入りの文人官僚であつたのでしょう。

詩にあるとおり岑守は官吏となつて以来、十年の間に多くの知人・友人を失っています。代表的な人は岑守が最も頼りとした賀陽豊年（かやとよし 七五一〜八一五）です。豊年は陸奥出立の直前に亡くなりました。豊年は「当代の天才」といわれた当時最高の知識人であり、岑守の父である征夷副將軍小野永見の親しい友でもありました。「凌雲集」の序文には、その編纂に苦勞した際に、病に伏せていた豊年に再三相談をしたということが書かれています。

この岑守が陸奥守となつたり後年は大宰府の責任者になつたりして日本の東西

を駆けめぐつて活躍する一方で漢詩人として名を高めることにもなるのですが、その前に少し遠回りをして小野氏についておさらいしておきましょう。

三

小野氏のルーツは滋賀県大津市の小野であるといわれています。また、京都市左京区上高野付近や随心院がある山科区小野のあたりも根拠地にしていたと考えられています。御先祖は第五代孝昭天皇の第一皇子天足（あめたらしひこ）彦国押人命とされていますが、もはや神話の世界のようなことであり真偽の程は分かりません。

その実在が確実で歴史的に有名な小野氏の人物としては小野妹子がいます。推古十五年（六〇七）、「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す」の国書を隋の煬帝にもたらしした使者となつた人です。

東野治之氏によると、この「日出づる処の……」の文言は倭の国の隋に対する優越意識を示したのではなく仏典の「大智度論」に使われている表現を借用したに過ぎず「東」と「西」を文飾したもので優劣の意味はないとのこと。日本も仏教を信仰する文明国であるというメッセージをこめた表現だつたということです。

この頃の倭の国は朝鮮半島南部の伽耶国をめぐつて高句麗・百済と共同して新羅と戦いを続けていた時であり、隋にケンを売ることがありえない時期でした。歴史の教科書にはあまり触れら

れませんが聖徳太子の弟が二人までも高句麗・百済との軍事共同行動のため「撃新羅將軍」に任命され渡海準備をしていたことは注目すべきことです。朝鮮半島の状況を考えれば大国である隋と好い関係を結ぶことは急務でした。

重大な使命を帯びて隋に向かった小野妹子ですが、「無礼だ」と煬帝を怒らせたといえ倭の国への皇帝の興味を持たせることには成功しました。倭の国情を知るために名家の出身で外務官僚の若手といえる裴世清をつかわしたのですから。裴世清は国情視察という任務だけでなく「井の中の蛙」のような態度をとった倭を手なずける使命も負って来日したのでありましょう。

妹子は翌年ふたたび使者裴世清をともない隋へと向かっています。持参した国書には「書を致す」といった表現はなく、「東の大王、敬みて西の皇帝に白す」と書き出され「慎みて白す」で結ばれたものでした。対等な関係を示す表現から相手を上にした表現へと変わったのです。隋の意向を反映して倭の対応が軟化したのです。

小野妹子の官位は冠位十二階の最高位である大徳(実質は上から四番目であり、もっと上位の織冠・繡冠は王族が、紫冠は大臣蘇我氏がかぶっていた。彼らは冠位十二階を超越した存在であったのである。「大徳」は律令制の頃の位階では正四位上にあたる)にまで至りました。生没

年はまったく不明です。

妹子の子が小野毛人です。この人がどのような人であったか、はっきりと示す史料はありませんが、実在の人物であったのは間違いないでしょう。江戸時代初期(一六一三年)に八瀬遊園近くの崇道神社の近辺で彼の墓誌が発見されているからです。この墓誌についてさまざまな議論があるのですが、ここでは墓誌に書かれた内容だけを確認しておきます。

墓誌には毛人が天武天皇に仕えたこと、六七七年に死亡したこと、正四位相当の刑部省の長官であったことなどが書かれています。六七七年といえは壬申の乱の五年後です。六四五年の乙巳の変(大化の改新 中大兄皇子らのクーデター)からの混乱の時代を名門の子である毛人がどう生きてきたのか、興味がありますが、まったく分かりません。

蛇足ですが、壬申の乱に参加した民衆について一言。

日本古代最大の内乱である壬申の乱は追いつめられた大海人皇子が急遽立ち上がって大友皇子に勝利した戦いであったという見方は近年否定されつつあります。やはり大海人皇子側の周到な準備のもとにすめられたというのが有力な見方となっています。大海人皇子のもとに集まった美濃や尾張の兵を中心とした東国の兵力は圧倒的な力を備えていました。この東国の兵力が戦いを大きく左右したのです。では、壬申の乱が民衆にどんな影

響を与えたのか、わずかにうかがい知ることのできる史料が存在します。

奈良の正倉院には大宝二年(七〇二)に作られた戸籍がいくつかの地域ですが、今に伝えられています。その中で特に注目されるのが「御野国加毛郡半布里」の戸籍です。半布里の場所は名刀「関の孫六」で有名な関市のすぐ南、現在の岐阜県加茂郡加加町にあたります。

正倉院に伝えられた半布里の戸籍は、この里を構成する五十八戸のうちの五十四戸分が残っていて一つのサト(里、五十戸)のほぼ全体の姿が分かるため、大変に貴重な史料といえます。詳しい内容はまたの機会に述べますが、戸籍によれば半布里には一一九人の人々が暮らしていました。その中で位階を持っている男性が三人います。六七二年の壬申の乱の時、彼らは二十八歳から三十歳であったので、乱の戦功によって叙位されたにちがいありません。また、同じ年齢の者の中では手足の不自由な人々もいて、戦争で負傷した者たちも少なからずいたことがわかります。

半布里の最長老の男性は八十六歳、名前は秦人古都。女性は九十三歳、名前は若帶部母里売です。私たちの予想と違って彼らが現代と変わらぬ長寿を保っていた驚かされます。七世紀初めの聖徳太子と蘇我馬子の時代から大化の改新、壬申の乱、律令体制の最末端を生き続けた彼らがこの変動の時代をどのように生きた

のか気になります。今は小野氏の人々を追いかけていきます。

四

小野毛人の子が小野毛野です。亡くなったのは和銅七年(七一四)四月。従三位で中納言まで至りました。遣新羅使となつて新羅に赴いたり筑紫大弐(後の大宰府の次官)に補任されたりしていることから外交関係の官職を歴任したものとみられます。大宝二年(七〇二)には参議となつて朝議に参加して平城京に遷都した元明天皇の重要なブレーンの一人として活躍したらしいのです。

毛野の子であるといわれている人物が小野老(？七七三)です。「万葉集」に収められている

あをによし寧楽の京師は

咲く花のにはふがごとく今盛りなり

という彼の歌はよく知られています。この歌は七二九年に大宰少弐として赴任した小野老を大宰府の長官であった大伴旅人が歓迎の宴を開いた場で彼が詠んだ作品です。この宴会は山上憶良の有名な次の歌でお開きになりました。

憶良らは今は罷らむ子泣くらむ

それその母も我を待つらむぞ

「万葉集」三三七番 ついでに言えば新元号「令和」で有名になった天平二年(七三〇)、大宰府で大伴旅人が主催した宴会の場に次官であつ

た小野老も参加していて次の歌を作っています。

梅の花今咲けるごと散りすぎず

我が家の園にありこせぬかも

梅の花は、今咲いているとおりに、散ってしまったので、私の家の庭園にそのまま咲いていてくれないだろうか

「万葉集 八一六番

「梅の花……」の歌のできばえは「あをによし……」と同じく宴会用に作られた歌で筆者にはさほど面白い歌とも思えません。

小野老は従四位下まで至り毛野と同じく大宰大貳となるなど外交関係を扱う官僚の道を歩んだと思われる。

「日本書紀」には太宰大貳となった彼が行った事績として天平七年（七三一）に薩南諸島に漂着船の道しるべとするために各島に島の名称、船の停泊場所、水場および往来する国々からの距離を記した碑を建てたことが記されています。遣唐使をのせた船がその途中で暴風雨にあい唐に派遣された役人や留学生たちの多くが水死したことはよく知られていることです。遣唐船に限らず、近辺の海で遭難・漂流・漂着する人々も多かったことでしょう。

実をいうと、漂流者のために碑を建てた小野老の子である小野石根は大使に任じられた佐伯今毛人が病気を理由に渡航を拒否したため大使代理となって入唐することとなりました。しかし、事を終え

たその帰途、暴風雨のために船が破断し唐からの使者趙宝英ら六十三人の人々とともに水没死しました。宝龜九年（七七八）のことです。このことを悼んで朝廷は従五位上の石根に二階級を飛び越して従四位下の位階を贈りました。

この石根の弟であり出羽守にもなった小野竹良の子が岑守の父となる小野永見です。次回はこの永見と岑守について述べる予定です。

【補足】

天平元年（七二九）の大事件といえは同年二月に起きた長屋王の変であろう。藤原氏系で皇位を継承しようする聖武天皇の皇子がいなくなった危機感から天武天皇の孫である長屋王とその正妻である吉備内親王（文武天皇の妹）、そして二人の間に生まれた四人の皇子すべて（この子供達が最も皇位に近かった）を藤原不比等の四人の子たちが自殺に追い込んだ事件である。

これによって藤原氏は光明子を聖武天皇の皇后とすることに成功し、以後、古代から朝廷に大きな影響を及ぼしてきた他の有力貴族を二度と立ち上がれぬほどに圧倒していくこととなる。

天平元年の大宰府での宴会は長屋王の変からいくばくも経たないころに開かれたと思われる、藤原氏一辺倒になっていく政局に対する思いが宴会の参加者がつくった歌にもそれぞれ表れている。

たとえば、「あをによし……」と小野老が詠ったあと大伴一族の一人で大宰府防人司（だざいふさきもりのつかさ）の三等官であった大伴四綱は旅人に向かつてこう問いかけている。

藤波の花は盛りになりにけり

奈良の都を思ほすや君（三三〇番）

藤の花は盛りになりました。奈良の都のことをお思いになりますか、旅人さま

「藤の花」は藤原氏を暗示していることは参加者の誰もが知っていたに違いはない。その中で四綱は「長屋王がいなくなった今、藤原氏の天下ですよ、どうされます」と旅人に問いかけているのである。これに対する旅人の歌はとてもさびしい。

わが盛りまたをちめやもほとほとに奈良の都を見ずかなりなむ

（三三一番）

私の年の盛りが再び返ってくるであろうか。もしかして奈良の都を見ずに終わってしまうのであろうか

藤原氏が台頭してくることに對して四綱は歓迎しているようだが旅人はかなり悲觀的である。この歌の後に続けて旅人は吉野の離宮や彼の故郷である飛鳥のことを懐かしいと四首の歌を詠んでいる。その地は藤原氏の勢力がまださほど大きくはなかった藤原京のあった地であり、旅人が青年時代を過ごした忘れることのできぬ地でもあったのである。

隠された歴史（6）

満田 正賢

今回は邪馬台国の時代に戻って、三角縁神獸鏡に関する話をしてみたいと思います。私は古代の鏡の研究者でも考古学の専門家でもなく、今までは古田武彦氏が三角縁神獸鏡に関して述べた本の内容を少し覚えていた程度でした。しかし、茨木市立図書館でたまたま「邪馬台国と安満宮山古墳」（一九九八年・高槻市教育委員会編・吉川弘文館）という本を手にし、その本のかんりの部分が三角縁神獸鏡に関して非常に興味ある内容に費やされていたので、それに触発され三角縁神獸鏡に関する本を読みあさりました。その結果、通説とは全く逆の結論、すなわち三角縁神獸鏡の存在は邪馬台国近畿説を否定するものではないかという新しい考え方に至りました。

三角縁神獸鏡とは

今回話題にする三角縁神獸鏡（さんかくえんじんじゅうきよう）については知っておられる方が多いと思いますが、近畿を中心にして日本各地の古墳から大量に出土し、中国の年号や作者名が銘に記されているにも拘わらず、中国からは全く出土されていないという不思議な鏡です。そして、一部の鏡に記されている「景初三年」という年号が、卑弥呼が「親魏倭王」の印をもらった年にあたるため、これがその時卑弥呼が魏から与えられた

鏡であると考えられました。三角縁神獸鏡とは、外周の縁の部分が三角山のようにとがっており内面に神人と獸形が描かれている鏡の総称ですが、その特徴は六つにまとめられています。

①中国で出土する鏡の大半が直径一〇センチ程度であるのに対して面径が二〇センチを超える大型鏡が多い

②外区は「鋸齒文―複波文―鋸齒文」の三帯構成を原則とする。

③内区外周に銘帯または文様帯を有する。

④内区主文区は乳によって四分割または六分割され、その間に神人や獸形を配する。

⑤図像配置には求心式と同向式の両種がある。

⑥銘帯の銘文には「吾作」「某氏作」「新作」「尚方作」などで始まる八形式が見られる。

*福永伸哉著「三角縁神獸鏡の研究」より
私は三角縁神獸鏡は卑弥呼が魏から与えられた鏡ではないと考えています。その理由は左記の通りです

①三角縁神獸鏡は中国で全く出土されない。

②日本で発見された三角縁神獸鏡の枚数は、卑弥呼が魏より贈られた銅鏡百枚をはるかに超える

③古墳から鏡が出土するとき、多くの場合棺の中の頭の部分には漢式鏡が置かれており、三角縁神獸鏡は棺の外に埋められている。三角縁神獸鏡はけして貴重な鏡として大切に扱われていない。

④魏の王朝が卑弥呼に与えたのは漢式鏡

と考えるほうが妥当である。漢式鏡は北九州に集中的に出土している。

三角縁神獸鏡の系譜について

三角縁神獸鏡を作成した工人が中国人であることは各研究者とも一致しています。それは中国の年号の他、陳氏・顔氏・王氏・張氏という中国人の作者銘が刻まれているからです。しかし、その作者が呉の工人であるか魏の工人であるかについて、意見が分かれています。中村潤子氏（同志社大学非常勤講師）は、「最も重要な半肉彫りという主文様が鑄造技術も含めて呉の系統の技術である点への有効な反論はなされていない。中央の鈕の穴が長方形だったり、文様帯の外側に突線が巡ったり、という三角縁神獸鏡の特徴が中国東北部の方格規矩鳥文鏡に見られるという指摘もあるが、日本での鏡作りに出自が異なる人達が関わったとも解釈出来よう。」と述べています。（森浩一の古代史・考古学「KADOKAWA 掲載の「三角縁神獸鏡の国産説」中村潤子二〇一四年」）

中村氏が触れた考察は福永伸哉氏（大阪大学教授）の考察です。（「三国時代の鏡と三角縁神獸鏡」「邪馬台国と安満宮山古墳」掲載・及び「三角縁神獸鏡の研究」大阪大学出版社）。福永氏は、北方の魏の領域で中国の呉の領域と異なるタイプの神獸鏡の生産も少量であるが行われていることに注目し、中国の現在の河北省とか遼寧省、北京市あたりに存在する非常

に変わった形の鏡と三角縁神獸鏡が製作工人のレベルでつながりがあると結論づけました。福永氏は三角縁神獸鏡に共通する三つの特徴 ①長方形鈕孔②外周突線③特異な銘文語句 が呉の年号鏡とは異なる特徴であり魏の東部地域から出土した鏡と同じ特徴をもつと考察しました。特異な銘文語句では、三角縁神獸鏡以外にほとんど見られない「銅出徐州（同出余州）」という語句が遼寧省遼陽三道壕から出た方格規矩鳥文鏡にあり、同じく「甚獨奇（甚だ獨り奇なり）」という語句が河北省易県から出た方格規矩鳥文鏡にあり静岡県松林山古墳から出た三角縁神獸鏡の銘文と全文が全く一緒であることを発見しました。全文が全く一緒という鏡が三角縁神獸鏡以外で見つかったのは初めてです。そして福永氏は、「東方の工人が洛陽の官宮工房に招集された、あるいは官宮工房の工人が東方に向いて現地の工人を組織したなどの場合が想定できる。……後者は製作地論争で主要な論点となった「師出洛陽」「用青銅至海東」などの銘文解釈、実在していなかった景初四年鏡の存在などが、無理なく説明出来る点で有利だ。」という仮説を述べています。しかし、福永氏が考えた官宮工房の工人が東方に向いて現地の工人を組織したという仮説については「魏志倭人伝に「魏から卑弥呼への下賜品を装封して渡す」と書かれており、洛陽から倭に向かう途中で鏡を加えるということ

はあり得ない」という理由で否定されています。（シンポジウム「検証・邪馬台国・安満宮山古墳をめぐる」―「邪馬台国と安満宮山古墳」掲載）

福永氏は三角縁神獸鏡を製作した工人がいた地域を魏の東部地域と表現していますが、洛陽周辺には福永氏を取り上げた特殊な鏡とは違う鏡が存在しています。この特殊な鏡が存在する地域は、景初二年（二三八年）に魏によって滅ぼされる前約五〇年間にわたって半独立政権としてこの地域を支配していた遼東公孫氏の領土と近隣する河北地域です。魏は蜀・呉との抗争に明け暮れており、魏が河北を制定した建安十一年（二〇六年）から遼東公孫氏が滅亡した景初二年（二三八年）までの間、河北に遼東公孫氏の文化が及んでいた可能性は十分にあります。又遼寧省遼陽三道壕から「同出余州（銅出徐州）」という銘文をもつ鏡が出土していることから、遼東公孫氏は山東地域とも交流していたことが推測できます。そして重要なのは、遼東公孫氏が魏の配下という体裁を取りながらも呉とも付き合うという独自の外交政策をとっていたことです。福永氏自身が、当時遼東公孫氏の支配下にあった楽浪郡地域で中国の南方で作られていたような画文帯神獸鏡と北方系の二神二獸鏡とかいうものが両方とも出土するという事実を取り上げ、遼東公孫氏支配地域において呉の技術と魏の技術とが融合した可能性を示唆して

います。三角縁神獸鏡と技術的につながっている工人とは遼東公孫氏の支配地域で独自の鏡を製作していた工人でありその鏡は周辺の地域にも及んでいたと考え、て間違いないのではないのでしょうか。

三角縁神獸鏡の製作時期について

三角縁神獸鏡の中には中国の年号が刻まれた紀年鏡と呼ばれる鏡があります。

この中の□始元年鏡、景□三年鏡の実物の文字は、正始元年、景初三年と読み取るのが困難ですが、本来存在しないはずの「景初四年鏡」の年号は明確に読み取れます。前述した中村潤子氏は、「景初四年鏡の盤龍の間隙に景初三年鏡や正始元年鏡に見られるのときわめて類似した小さな獣面が見られる点は、この三種の生産体制が工人レベルで関連したことをうかがわせる。」とし、「それぞれがほぼその年号の時期、すなわち魏への使者派遣の機運が生じた頃から実際に帰国した頃にかけて魏鏡に偽装して日本列島で作られたと見た方が、無理のない理解と思われる。」と論じています。

私は青龍三年（二三五年）銘の方格規矩鳥文鏡が日本で三面出土していることも考慮しなければならぬと考えます。

青龍三年は魏が公孫氏により東夷との接触を阻まれていた時期の年だからです。後代の工人が記念すべき年を鏡に記したという考え方は、青龍三年・景初三年・景初四年・正始元年という近接した複数

の紀年鏡が出土していることの説明がつきにくいと考えます。

又、以前は前方後円墳の成立は四世紀と考えられていたのですが、三角縁神獸鏡が出土した前方後円墳の製作時期が三世紀半ばと考えられるようになって、卑弥呼の時代に中国の工人が渡来したことを否定する論拠もなくなっています。

青龍三年鏡・景初三年鏡・景初四年鏡・

正始元年鏡については、その一つ一つを後代の工人が記念すべき年として記したとは考えにくいものです。後代の工人が記したのであれば、すべて「景初三年」に統一されていくべきです。まして、存在しない景初四年という紀年を記した鏡については、景初三年から正始元年に移行する混乱の中で製作されたと考え、る意外に説明がつかないものです。

ところで、三国志東夷伝序文で陳寿が述べているように魏は公孫氏に阻まれたため、東夷諸国と接することは出来ませんでした。魏が公孫氏を滅ぼすことによってやっと東夷諸国と直接交流することが出来るようになったのは景初二年（238年）です。そして卑弥呼が銅鏡百枚をもらったのは正始元年（240年）です。

公孫氏は帯方郡を設置しました。当然倭を含む東夷諸国との交流を始めたはずで、その交流の証拠が、公孫氏の支配地域にいた工人が製作したと考えられる青龍三年（二三五年）鏡ではないでしょうか。もう一つの可能性としては、亡命し

た公孫氏の工人が携えてきた鏡だったということもありえます。

原口正三氏（甲子園短期大学講師）はシンポジウム「検証・邪馬台国安満宮山古墳をめぐる」の中で、「鏡を道教的な一つのマジカルな道具として必要だと考えている日本の誰かが、政情が不安定な中国東北辺あたりの職人を厚遇してどんどん連れてきたと考えている」と述べていますが、渡来人の立場から見れば「政情が不安定な中国東北辺あたりの職人が、身の安全を求めて倭に逃げ込み鏡作りを伝えた」と解釈出来るのではないのでしょうか。

三角縁神獸鏡の研究者のすべてが、「景初三年」を「卑弥呼が「親魏倭王」の印をもらった記念すべき年」という視点で捉えています。が、「景初三年」は「公孫氏が滅亡した年の翌年」でもあることにも注目すべきと思います。

導かれる歴史解釈

今まで述べたことを整理すると、公孫氏の支配地域にいた工人が戦火を逃れて交流のあった倭の奥深くに逃げ込み、自らの保護と引き替えに新しい鏡を製作し献上した。又は工法を教えたということになります。だからこそ中国ではその鏡が出土しないのです。必然的に、この新しい鏡が大量に出土する場所こそ、公孫氏と交流があり公孫氏支配下の工人を保護した倭の権力者がいた場所となります。

三角縁神獸鏡が倭に亡命した公孫氏の工

人が倭（日本）で製作した鏡であると想定すると、存在しない景初四年という年号が記されているという問題点の説明も容易になります。すなわち亡命者は本国の情報入手が困難であったということで説明出来るからです。また、三角縁神獸鏡国産説の王仲殊氏が指摘した景初三年銘三角縁神獸鏡にある「絶地亡出（亡命して出でてこの地にいたった）」という語句が、時代的にもピッタリと適合するのです。

*但し、この語句を「杜地之出（洛陽に隣接する杜陵県の鏡工房の出）」と読み取る研究者もいます。

青龍三年鏡は日本で三面出土していますが、出土した場所は①京都府弥栄町と峰山町にまたがる大田南五号墳（現京丹後市）②高槻市安満宮山古墳③関東地方の個人蔵資料です。公孫氏と倭との交流は北九州ではなく山陰・北陸地方を窓口にしていた可能性が高いと思われます。

公孫氏は日本海経由で近畿地方の豪族と交流していました。そして、三角縁神獸鏡が大量に出土した近畿地方こそ公孫氏の支配地域にいた工人を保護した豪族がいた場所でした。公孫氏の工人を保護するという行為と、魏に朝貢するという行為とは相容れない行為です。

ここから導かれる結論は「公孫氏の工人を保護した近畿の勢力は、魏に朝貢した卑弥呼とは相容れない、卑弥呼の支配地から離れた地域にいる勢力であった」ということではないのでしょうか。

孫ウオツチング (27)

福田 圭

お兄ちゃんの光君は水ぼうそうに罹りました。水ぼうそうは治りかけでしたが、アトピーがあるので、二つが重なって、かわいそうでした。弟の葵君にもうつった様で、また仕事を休んでお医者さんに連れていかねければなりません。共働きの子育ては大変です。

葵君もやんちゃで、今日は絵本を破り、昨日はお茶碗を割り、一昨日はごみ箱をひっくり返し等、男の子二人の子育ては家がボロボロになりますね。白い敷物には、黒のマジックで線が二本落書きしてありました。

散歩にお出かけするのにお母さんが「靴下をはかない」と言うと、光君が弟の分まで引き出しから出してきて、弟に渡し、自分の靴下を履きだしました。「さすがお兄ちゃん」と思ったら、散歩の帰り道、葵君は歩いているのに、お兄ちゃんが「抱っこ」と言ってお父さんに抱っこしてもらっていました。弟が出来たことによる「赤ちゃん返り」も同居しています。

可愛い靴を履いて葵君はこれぞ「ヨチヨチ歩き」とばかりよく歩きます。弟の葵君は一歳半を過ぎて「自分でする」と何でも自分でしたがるようになりました。けれども、「ダイナミックに」自分で食べるので「食べ散らかす」とは「こういう

事をいうのだ」という見本状態だそうです。

家の近くの散歩道には、赤や黄色や白など色とりどりの花が咲き、綺麗です。でも、水仙、雪柳は分かりましたが、ほとんど花の名前がわからないのが残念です。文科系人間の私は、植物の名前はさっぱりです。

散歩の後、お昼御飯に回転ずしを食べに行きましたが、二軒とも「一時間待ち」です。日曜日は予約なしでは回転ずしにもありつけません。仕方なく「モスバーガー」に行きました。「モスバーガー」は「一九七二年日本発」だそうです。知らなかった。お寿司よりはお爺ちゃんの支払いが少なくて済み助かりましたが……。子どもたちは、なかなか食べようとせず、大人が食べ終わった頃によりやくく食べだし、時間のかかることです。次回は「みんな温泉にでも行こうか」と約束して帰途につきました。



投稿小説 レクイエム

古城 悠

桜の樹の下で見る夢は悪しきけわいに染まると人の言う

昔、付きあっていたヤツが言った言葉だ。今ならわかる、有名な詞章からのパクリだと。でも、あの頃はカッコいいこというじやんと思ったりしたものだ。まだ子供だったんだろう。あいつがいなくなつて何年かが過ぎた。きれいに咲いたあと、風に吹かれて桜が散るように、あいつは自然にいなくなった。わたしも追いかけなかった。きつと大人になつていったんだろう。この頃なぜか、あいつのことを思い出す。記憶のなかのあいつはいつも桜の樹の下でと囁いている。ほかに思い出はあるはずなのに、無理にたどらないと景色は浮かんでこない。夏祭り、夜店で金魚すくいをしたはずなのに、あいつの言葉は聞こえない。初詣、いっしょにお賽銭を投げたのに、なにをお願いしたのかも憶えていない。春になって水辺の遊歩道を並んで歩いたとき、花を見上げてあいつはこういった、桜の樹の下で見る夢は悪しきけわいに染まると人の言う。

桜の樹の下で夢を見るって、どういう場面なんだろうなんて、あのときは思いもしなかった。ふーん、いいこと言ったのかな？、ちよつと気障っぽいけどね、とそう思っただけだ。いくら経つて思

い返すと、桜の樹の下で夢を見るってどういうこと？と首をかしげていた。夢を見るんだから眠っているんだろうね。桜の樹の下なんだから屋外なんだよね。屋外で眠るなんて、それだけで特別なことになっているんですけど、大丈夫なのか、とツツコミたいところだらけだ。ああ、そうか、もしかするとあいつ、自分の言葉に酔っていただけなのかとも思う。これも今だからそう思えることなんだけど、そういう年頃って、たしかにある。それをカッコいいかも？って思うのと同じで、あいつもわたしも子供だったんだろう。

あいつを思い出すにつけ、桜の樹の下で本当に夢を見てみたくなった。木の根元にからだを横たえてみる、すると次第に意識が遠のいていく、そうして夢うつあのあわいを彷徨っているうちにストンと落ちてくれる。そのあとで見る夢はどんなになつていようだろうか。あいつの言う通り、悪しきけわいに染まるんだろうか。と、そんなことが知りたくなった。もちろん桜ならなんでもいいわけじゃない。少なくとも大きな一本桜、願わくは人里離れたヤマザクラ、望月の夜に悪しきけわいを誘うのはそんな存在感のある樹のはずだ。それでいくつもの場所をめぐってきたあとで、ようやくここにたどり着いた。大きな樹だ。思いつきり腕を伸ばして幹ごと抱え込もうとしても半分にも届かない。端から見ると抱え込んで

いるんじゃないくて、抱きついてるか凭れかかっているかのように見えたことだろう。それになによりも嬉しいのは蜘蛛手にひろがる枝振りだ。ちょうどいい高さには太い枝もある。幹に張りつく態勢で見上げると、太い枝、細い枝が複雑に重なって平衡感覚も失われる。樹の大きさは、こうやって真下から見上げたときに生身の感覚で捉えることができる。遠目に眺めるだけならまわりの景色との比較で見てしまつて頭での理解に留まるんだけど、真下から眺めあげてその樹だけで視界をいっぱいにすれば、樹がからだ全体を包みこんでくるような感覚に捉われる。枝先の隅々に指の感覚が乗り移ったかのように、いろんなところがチクチク感じている。そのチクチク感に馴染んでくると、今度はからだ全体が引き伸ばされていくようだ。わたしの意識が樹に入り込んでいるのか、樹がわたしを吸い上げているのか、なにか開放的な気分になっているのがわかる。

闇の中に広がる花びらは、色も大きさも上下の重なりも、よく分からない。もとより立体感は失われているので平面だと言われるとそうも見える。まるで黒い壁に吹き付けられた薄銀色の飛沫だ。

風？、平面に固定されているはずの飛沫が少し揺れたかに見えた次の瞬間、それらは浮きあがり、続いて右へ左へと乱れはじめた。雪が舞う。花の季節だというのに？、いや雪じゃなくて花吹雪だ。強

い風が吹き抜けたことで樹が春の吹雪を生んだらしい。巨大な桜の樹が何十本もあるその枝をいっせいに揺らせて花びらを散らしているのだ。頸の紐が上につながっているのを確認してそのまま花びらのなかへ身を抛りだした。からだは軽くなつたかと思うと、なにかが爆発したみたいに一面が光に包まれた。そして時間が止まつたのだろうか、一瞬にして消えるはずの意識が何秒何十秒にも伸ばされている。痛みなんてあるはずがない。そのなかでわたしを呼んでいる声が聞こえる。あいつの声？、あいつがわたしを呼んでいる？、そつか、もしかしてわたし、もう少し、生きていてもよかったんだ。いま、ものすごく、気持ちいいんだよ。

(了)

編集後記

新しい元号が決まりました。平成元年は私には厳しい時期でした。今回は、歳を重ねたこともあり穏やかに迎えられました。

老いると嫌なこともあります。いいことも沢山あります。不細工なことをしても周りの人が年寄りだからと許してくれま。また自身も、お前は年寄りなんだからと自分に言い聞かせ、出しゃばる我欲を抑え淡々と日々を過ごす術を少しずつ身に付けてきたように思える今日この頃です。

(嘉)

婚姻は、両性の合意のみに基いて成立するのではなかったか

日本国憲法第二十四条は言う。

「婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない。配偶者の選択、財産権、相続、住居の選定、離婚並びに婚姻及び家族に関するその他の事項に関しては、法律は、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して、制定されなければならない」と。憲法のこの規定について、もしかすると、両性という表現は今日では性的多様性を反映していないという意見があるかもしれないが、それは置く。要は、婚姻は、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して、両性の合意のみに基いて成立するという点である。

そう思っていたがしかし、私が住む水の上の世界では、いや水の上の世界の雲の上の世界では「真子さま」をめぐって必ずしもそうではないらしい「議論」が延々と週刊誌やテレビをにぎわしている。結論的には、両性の合意のみに基くことに何やら執拗に介入し異議を唱えている風に見える。象徴につながり税金で

支えられているのだから、国民の声を代弁してもの言うと言わんばかりの論調である。

そんなときである。真子さまの妹の「佳子さま」が本質をついた発言をした。三月二十二日、大学卒業の日のコメントである。

「私は、結婚においては当人の気持ちが必要であると考えています。：姉の一個人としての希望がかなう形になってほしいと思っています」そのあとにこう続けて言った。

「姉の件に限らず、以前から私が感じていたことですが、メディア等の情報を受け止める際に、情報の信頼性や情報発信の意図などをよく考えることが大切だと思っています。今回の件を通して、情報があふれる社会においてしっかりと考えることの大切さを改めて感じています」

何と言う、真面目で、知的で、物事の本質を批判的にとらえた真つ当な意見であることか。私は脱帽し一個人として真摯に耳を傾けたが、案の定と言うべきか、コテンパにやられたと思ったかどうか知らないが、この発言を良しとしない論調が週刊誌に踊った。ちなみに、先の発言において佳子さまは、父上を評し「導火線が短い」と発言。それを聞

いていて私は思わず笑ったが、週刊誌等の素早い反応は導火線なしの、まるで「瞬間湯沸かし器」とでも評したいような反応ではあった。

それにしても憲法は皇族に適用されないのか。天皇の「生前退位」をめぐっても皇室典範により天皇の代替わりは「死を以て貴しとなす」が如き議論があった。天皇は象徴として死ぬまで働くものなのか。まさか国民が死ぬまで働かざるを得ない国だからではあるまいに。いずれにしても「生前退位」と言う、まだまだ元気なうちの隠居の規定がないなかで、退位をめぐる天皇の先の発言は、「天皇は、この憲法の定める国事に関する行為のみを行ひ、国政に関する権能を有しない」とした憲法第四条に抵触する危険を帯びざるを得ないものであった。発する言葉が慎重にならざるを得なかったのは当然のこと、生前退位は今回に限定的とされた以上、同じことがまたいつか繰り返されるのであろう。

いろいろと考えさせられた「佳子さま」発言ではあった。

俳句

土田 裕

山畑に人影のあり春霞

啓蟄やまこと戸惑ふ寒暖差

万歩越えなほ足伸ばす日永かな

黒猫のそりそりそりと春朧

水切りに興じる子ども水温む

影山 武司

マシユマロのやうな満月春の宵

春の星空に雫を散らすごと

母校へと上る坂道草青む

春漁の解禁を待つ船溜り

合格の祈願待つ列梅三分

公式を呪文のやうに受験生

妻遺せし針の糸解き針供養

春風をスウィングするや

ジャズバンド

春の水脈打つごとく岩を押す

川風と戯れる子ら百千鳥